

第1章 業務の目的と概要

1-1 業務の背景と目的

平成22年度に実施したエゾシカ・ヒグマの市街地等への侵入経路調査および侵入防止策の調査・研究により、本市の野生動物対応の問題点や課題が浮き彫りとなった。

本市においてエゾシカ・ヒグマ対策を実施していくにあたっては、調査・研究によって得られた課題などを踏まえ、本市の環境なども踏まえた効果的な侵入防止策と出沒対応を見極める必要があると考えられる。

このことから、本業務は調査・研究で得られた知見に基づいて、侵入防止策と出沒対応をモデル実施することで、本市の特性に合った野生動物対応を進めていくことを目的とする。これに伴って次の雇用までの短期の雇用・就業機会の創出・提供及び人材の育成を図ることを目的とする。

1-2 業務の項目および概要

(1) エゾシカに係わる業務

- 対象地域：市内一円
- 業務期間：平成23年4月1日～平成24年3月31日
- ア) エゾシカ生息調査・研究
- イ) 出沒対応
- ウ) 広報啓発

(2) ヒグマに係わる業務

- 対象地域：市内一円（北・東・白石・厚別区を除く）
- 業務期間：平成23年5月1日～11月30日（土・日・祝日を除く）
- ア) 出沒対応専門員配置
- イ) 奥山地域広域痕跡調査
- ウ) 中間地出沒調査
- エ) 市民向けヒグマ講座
- オ) 農家向け被害防除講座
- カ) 普及啓発
- キ) 市民アンケート調査または同等の効果を持つ市民意識調査

(3) 防除策の検討

発注者：札幌市市民まちづくり局地域振興部区政課

受注者：特定非営利法人 EnVision 環境保全事務所

業務期間：平成23年4月1日～平成24年3月31日

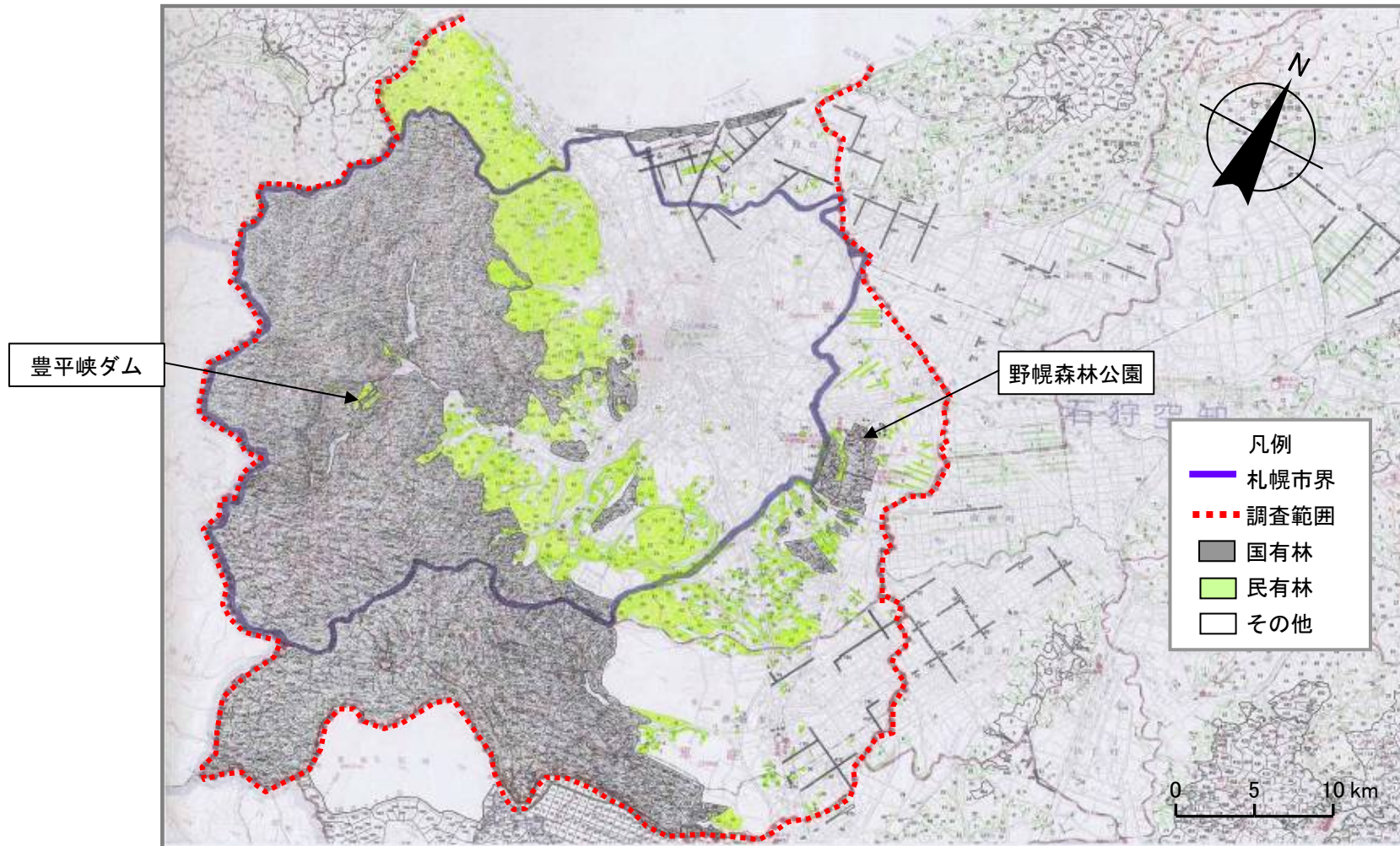


図 1-1 調査範囲図

1-3 業務の経過

(1) 業務経過

表 1-1 に業務の項目毎にその経過を一覧表にしてまとめた。また、以下に業務内容ごとにその概要をまとめた。詳細はエゾシカおよびヒグマの業務の報告ページにて記述する。

① 新規雇用者の募集とトレーニング

4月1日の成約を受けて、本年度業務に従事する新規雇用者の募集を4月中旬より行なった。

募集はハローワークを通じて行い、野外調査およびデータの扱いが出来る人材を、書類選考および面接試験を経て採用した。これらの新規雇用者の一部は平成22年度の札幌市のシカクマ調査業務に従事した経験者も含まれている。

新規雇用者の多くは、既に野外調査の経験があったものを選んだが、野生動物でしかもエゾシカとヒグマの野外調査には危険も伴うことから、全員に野外調査の手法、安全管理の講習を5月初旬～5月下旬まで行なった。また、エゾシカ出没の際には、出動の可能性が全員にあるために、全員を対象としたエゾシカ出没対応トレーニングを5回程度実施した。

② エゾシカ・ヒグマ関係調査

エゾシカ、ヒグマの調査については後ページで詳しく述べるが、基本的に新規雇用者をヒグマ調査班とエゾシカ調査班に振り分けて、1グループ4～5名のグループを複数編成して、土日祝日を問わずローテーションで現場調査に当らせる事とした。土日祝日の現場調査の真の目的は、土日祝日にエゾシカやヒグマの出没があった場合に迅速に対応できるための編成である。また調査に当っては、当 NPO の専属スタッフをエゾシカ調査班およびヒグマ調査班に各2名程度を張り付けて、指導に当った。

③ エゾシカ・ヒグマ出没対応

エゾシカとヒグマの出動に当っては、業務期間中に当 NPO スタッフが当番制で24時間の連絡受付体制をとった。通報があった時点で、当番と副当番が現場に急行すると共に、必要があれば獣医やその他のスタッフの応援を要請するという体制をとった。

ヒグマ出没対応については、多くの通報は自動車の運転中でのヒグマの目撃や、緑地の遊歩道でのヒグマ痕跡（足跡、フンなど）の通報であり、出没場所が住宅地周辺などではなく、緊急的な市民の安全確保に係わらない場合には、時間をおいてその情報の確認に現場へ出るという場合が多かった。しかしながら、果樹園や住宅地内でのヒグマ目撃や痕跡発見の場合は、市民の安全面から速やかな出動を行なった。

エゾシカの出没の場合は、大きく分けて交通事故と住宅地への出没であった。交通事故に関しては、多くの場合死亡もしくは瀕死の状態であってその場合には北海道大学の獣医学部などへの検体を行なって処理を終えた。一方、住宅街への出没は、性急に市民の安全が脅かされるため速やかな出動を行なった。

④ エゾシカ・ヒグマ防除策の検討

エゾシカに関しては本年度行なった出没経路調査結果、出没対応実績を経て防除対策について各種の検討を行い本報告書に記載した。一方、ヒグマの防除対策についても、出没経路調査と出没対応実績および、既存の緊急の対策委員会への専門家又はオブザーバーとしての出席経験を経て各種の検討を行い、記載した。

札幌市における大規模なエゾシカおよびヒグマの本格的な調査と出没対応委託は初めてであり、多くの課題も残っているが、関係者との調整をしつつ、また諸外国の事例なども参考にしながら可能性のある防除策の提案ととりまとめを行なった。

表 1-1 業務処理工程表

業務名：緊急雇用創出推進事業補助金交付要綱に基づく野生動物の市街地侵入防止策と出没対応モデル実施事業

工期：平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1. 業務計画・準備	←→											
2. エゾシカ業務												
ア) 生息調査・研究		←→										→
イ) 出没対応	←→											→
ウ) 広報啓発					←→				→			
3. ヒグマ業務												
ア) 出没対応専門員配置		←→						→				
イ) 奥山地域広域痕跡調査		←→					→					
ウ) 中間地出没調査		←→					→					
エ) 市民向けヒグマ講座				←→	→							
オ) 農家向け被害防除講座						←→	→					
カ) 普及啓発					←→	→						
キ) 市民アンケート		←→			→							
4. 防除策の検討										←→		→
5. 報告書の作成								←→	中間		最終	←→

1-4 業務の安全対策

(1) 事故時の連絡体制

本業務遂行に当っては、現場および移動行程において事故が発生した場合には以下の体制と要領で連絡を取るための「事故緊急連絡体制」で臨んだ。

<事故緊急連絡体制の概要>

- 1) 現場の担当グループ責任者はから EnVision 事務所へ連絡を入れ、指示を仰ぐ体制。
- 2) 事態が緊急を要すると判断された場合は、EnVision 事務所への連絡より早くグループ責任者から消防、警察、病院などへ連絡を取り、その後 EnVision 事務所へ連絡を入れる事を徹底する。
- 3) EnVision 事務所では、業務中に起こった大きな事故は速やかに発注者である、札幌市へ報告する事とした。
- 4) 軽微な事故（虫刺され、ウルシかぶれ、林道での軽微な接触自損事故など）は、早朝の全体ミーティングで報告し、注意を喚起することとした。

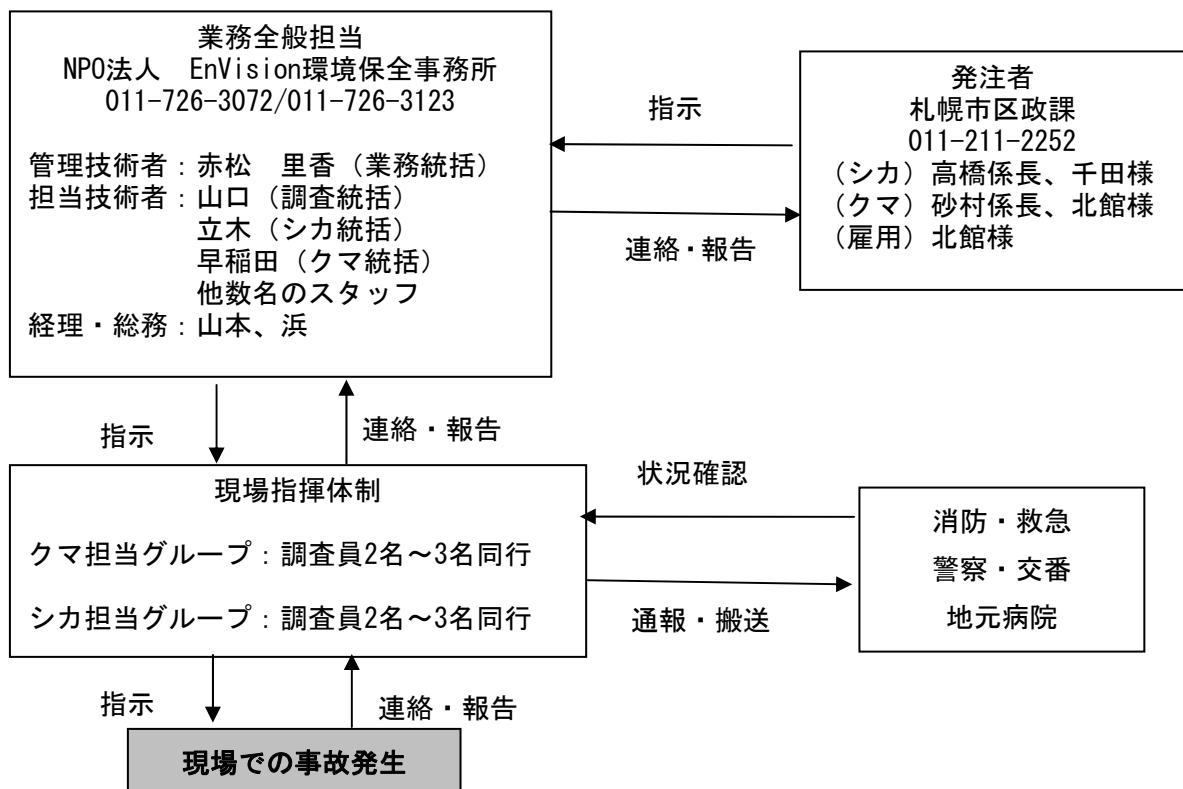


図 1-2 現場および移動行程などでの事故緊急連絡体制

（２）その他の事故防止対策

＜朝礼の実施と行き先ボードの設置＞

毎朝に調査班全員でミーティングを行い、各自の健康状態、その日の行動予定、その日の注意点（危険場所や天候など）喚起を行なってから業務を行なうようにした。また、複数の調査班が複数個所に調査に出かけるため、留守事務所の人間が、「誰が」「何処に」「どんな行動予定」で行っているかを一目で把握するための、行き先一覧ボードを作成し、壁に掲載した。行き先一覧ボードには、①行き先、②使用車種、③同乗者氏名、④帰着予定時間を書き込む様にした。現場での調査作業が終了した時点で、現場から事務所に携帯電話にて連絡をし、その日の業務完了と事務所への到着予定時間を知らせるようにした。

＜ハチアレルギー抗体検査の実施＞

野外調査に係わる、新規雇用者およびEnVision スタッフにハチアレルギー抗体検査を受診させた。対象のハチの種類はミツバチ、アシナガバチ、スズメバチで、その結果1名は強いアレルギー反応が起こる可能性が見出された。また、数名に若干の弱い抗体反応が見出された。

この受診により、各自および調査仲間がどの程度のアレルギー反応を示すかが事前に分かったため、強いアレルギー反応を起こす可能性のある1名には特効薬の「エピペン」を所持するようにさせた。また、現場でハチ刺されにあった場合には、直ぐに現場を離れ治療を行なうように指示した。

業務期間中にミツバチに刺された事故は数回あったが、いずれの場合も問題なく解消した。

＜日射病、熱射病への対応＞

本夏は各地で猛暑を記録し、熱中症での死者が多く記録されていたため、野外での調査には、「こまめに水分を補給する事」、「炎天下で長時間の作業をしない事」などを申し合わせた。現場調査班は3名～4名の複数での行動を義務付けていたため、お互いの健康状態のチェックを行い、野外での日射病や熱射病のサインを見逃さない様にした。

＜蛍光ベストの着用＞

特にエゾシカ出没対応などで夜間でも現場に急行する場合は、暗がりの現場で警察、区役所、及び住民などが混在し、さらに車が多く駆けつけているため、EnVision では蛍光ベストを作業員に着用させて、明確に判別が出来て車との衝突事故が起こらないように心掛けた。蛍光ベストは暗がりでの事故防止の目的であったが、それ以外にスタッフを容易に判別できてコミュニケーションを上手くとるのに役立った。